

① 史料A 小笠原越中守知行所着舟

常陸国原舎ヶ浜と申所へ
 図の如くの異舟漂着致候、
 年頃十八九か二十才
 くらいに相見へ、少し
 青白き顔色にて、
 眉毛赤黒く、髪も同断、
 齒は至て白く、唇紅に
 手は少しぶとりなれど
 つまはつれきれい
 風俗至て宜しく
 髪乱て長し、
 圖のごとくの
 箱に、いか成大切
 の品の由に候て
 人寄せ不申候
 音聲殊の
 外かんば
 しり、
 ものいゝ
 不方、
 姿はじん
 ぜうにして
 器量至て
 よろしく、
 日本にても
 容顔美
 麗といふ
 方にて
 彼国の
 生れとも
 いふべきか

下地鍍にて朱ぬの
 縦 壹丈壹尺
 横 差渡し 三間
 惣鉄
 筋金

②

— 鋪物貳枚、至て和らかな物
 — 喰物 菓子とも見へ、又肉に
 練りたる物有之
 喰物何といふ
 事を不知
 — 茶碗様の
 もの二つ
 美敷もよふ
 有之、石とも
 見へ
 — 火鉢らしき物壹つ
 □明ホリ有、鉄とも見
 亦ヤキモノ共見

— 船中改候所如斯の文字有之



右の通訴出申候

此箱 貳尺四方 白木にて
 至て木目よし
 ヒロウドにて
 金にてまだらに
 筋有之
 惣躰錦の様に成る
 織物にてしかと不分明
 色はもへぎ

史料B 兔園小説「うつろ舟の蛭女」

③

うつろ舟の蛭女

享和三年癸亥の春二月廿二日の午の時ばかりに、當時寄合

席小笠原越中守^{高五}知行所、常陸國はらやどりこま^{千石}

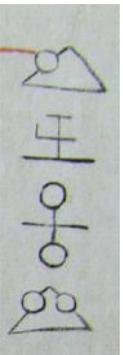
濱にて、沖のかたに舟のいよきもの遙に見えしかば、浦人等
小船あまた漕ぎ出だしつゝ、遂に濱邊に引きつけてよく見るに、
その舟のかたち、譬へば香輪のいよへんにて井さへ、長さ三間
あまり、上は硝子障子にして、チャンをもて塗りつめ、底は鉄
の板がねを段々筋のいよへんに張りたり、海巖にあたるとも打
碎かれざる爲なるべし、上より内の透き徹りて隠れなきを、

みな立ちよりに見てけるに、そのかたち異様なるひとりの婦人ぞめたりける
そが眉と髪の毛の赤かるに、その顔も桃色にて、頭鬘は假髪
なるが、由へ長くして背に垂れたり、そは獣の毛か、より糸か、
これをするものあることなき、送言語の通せねば、ちよこのものと
問ふよしもあらず、この鬘女、二尺四方の筥をもてり、特に愛
するものとおぼしめて、へへへもはなさずして、人をしもちかつげず、
その船中にあるものを、これかれと檢せしむ、

水二升許、小瓶に入れてあり 一本に、二升を二斗に作り、小瓶を小船に作り
敷物二枚あり。 小瓶を小船に作り、いまだ孰か是をし知らず

菓子やうのものあり、又肉を練りたる如き食物あり
浦人等うちつとどひて評議するを、のどかに見しよめめる

④ その圖左の如し



鉄にて

如此蛭字船中に

張りたる

多く有之

硝子障子

外は

チャンにて

長さ三間餘

塗りたる

假鬘

ねり玉

白し

青し

何とも辯じ

がたきもの也

此箱二尺四方

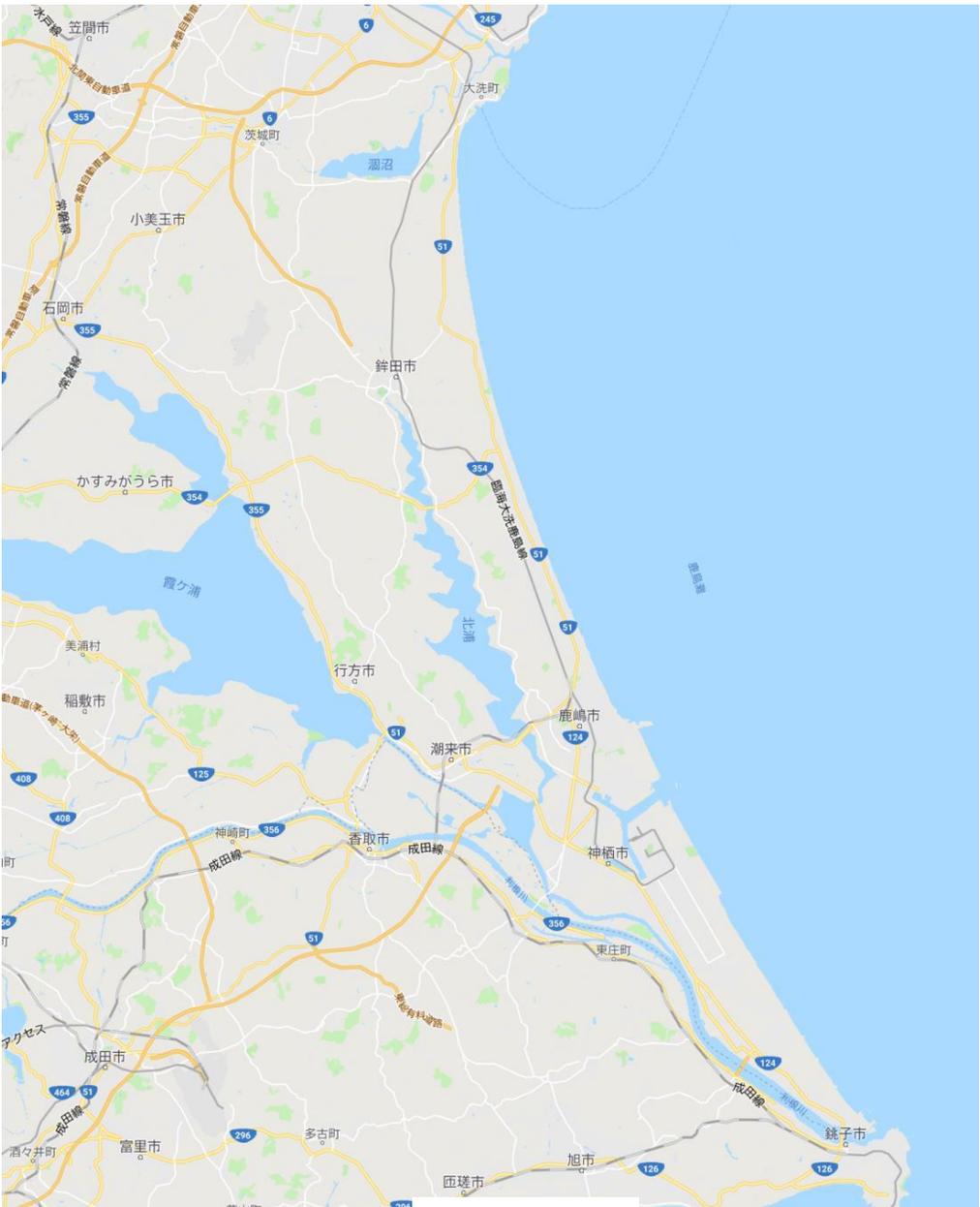
⑤のみ、故老の云、是は蠻國の王の女の他へ嫁したるが、密夫ありてその事あらはれ、その密夫は刑せられしを、さすがに王のむすめなれば、殺すに忍びずして、虚舟に乗せて流しつゝ、生死を天に任せしものか、しからば其箱の中なるは、密夫の首にやあらんすらん、むかしもかゝる蠻女のうつろ船に乗せられたるが、近き濱邊に漂着せしことありけり、その船中には、組板のごときものに載せたる人の首の、なまなましきがありけるよし、口碑に傳るを合し考れば、件の箱の中なるも、さる類のものなるべし、されば蠻女がいとをしみて、身をはなさんるなめりといひしこそ、この事、官府へ聞えあげ奉りては、雜費も大かたならぬに、かゝるものをば突き流したる先例もあればとて、又もこのごとく船に乗せて、沖へ引出しつゝ推し流したりとなん、もし仁人の心もてせば、かくまでにはあるまじきを、その蠻女の不幸なるべし。又その舟中に、



等

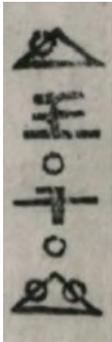
の蠻字の多くありしといふに於て、後におもふに、ちかきころ浦賀の沖に歌りたるイギリス船にも、これらの蠻字ありけり、かゝれば件の蠻女はイギリスか、もしくはベンガラ、もしくはアメリカなどの蠻女の女なりけんか、これも亦知るべからず、當時好事のものゝ写し傳へたるは、右の如し。圖説共に疎陋にして具ならぬを憾とす、

よへしれるものあらば、たゞねまほしき事なりか



常陸国 海岸

⑥ 史料の「かわら版」ししる舟の蟹女



此如の

文字

船の

中じある

緋なるやうのおりもの、色も入ぎ也

いじや

きんの

びんじある

- 一 去亥二月中、かくのじよんの舟、沖に相見へ申候所、又しびらへ見入不申候然る此度、小笠原越中守様御知行所常陸国かしま郡東舎ヶ濱へ、同八月のあらしにて吹つけ申候、うつろふね其内に女吉人、年の頃十九廿才程にて身のだけ六尺余りかほの色青白くまゆ毛髪赤黒くふつろぞく至るつづくしく、きりやうは甚美女也、おんせいはかんばしくうて大おん也又、しろ木の式尺ばかりの箱はなさずかゝい、大切まるものにや、あたりへ決て人をよせつけぬなり
- 一 敷物一枚至てやはらかな物
- 一 食物、肉るいにてねりたる物
- 一 茶わんのやう成もの一つ、うしくもやうあり、石とも見入ず
- 一 火鉢らしき物一つ、鉄とも見入ず

ふち 朱ぬり
いづれ 木は
したん
びやく たん
まご
びらう
すい
しやう 也

鉄にて朱ぬり 横三間なり

すじかね
なんばん
てつ 也
ふねの
高さ
吉丈吉尺

史料D 常陸国のうつろ船

鶯宿雜記 卷十四

一 享和三年亥八月二日、常陸国鹿嶋郡阿久津浦、小笠原越中守知行所
より訴出候に付、早東見届に参候処、右漂流船其外訳一向に相分り不申候に付、
幸太夫■遣候由也、紅毛通しも参候へ共相分不申候由、ウツロ船の内、年の

■按に、幸大夫は勢州白子の船頭に(て)オロシアへ漂流の幸大夫なるべし、
今に小石川御薬園に被差置、予もオロシア文字を手筋有、認賞し

頃廿一、二才に相見へ候女一人乗、至て美女也、船の内に菓子・清水も沢山に有之
喰物肉漬の様成品、是又沢山に有之候由、白き箱一つ持、是は一向に見せ
不申、右の箱。身を放さず、無理に見可申と申候へば、甚怒候由

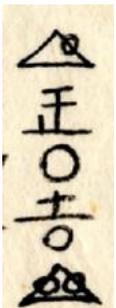


船惣朱塗、窓はびいどろ也、大さ 建 八間余
横 十間余

右は予御徒頭にて、江戸在勤のせつの事也、江戸にて分り兼、長崎へ被遣しと聞し
が、其後いづれの国の人か、分かりしや聞かざりし

史料E 長野の古書収拾家の史料

一 享和三年二月五日、小笠原越中守様
御知行所、房州の湊に如此舟吹付



如此文字
有之

右御見分は松原勝五郎殿・早川弥惣右衛門殿也
五日程生きて居り候所、其間食物をくれ
候へ共不喰、壺有之、ねりものをたへ
居り申候、日本の人を見て、手を合せ
何か申候得共、一向わからず、南の方へ向て
何か申せしが、是又わからず



如此ものを書

五日の夕方
死す、所の寺葬る

女

カミヲクビ

リシキシ、うつ

くつき由

玉 さしわたし三寸

内に玉あり

三尺四方

このつぼの内

ねりたるもの有之 喰也

高さ 壹丈二尺
長さ 五間ほど
金